新年のごあいさつ

担当常任理事　杉本 洋輔

新年おめでとうございます。

先生方におかれましては、健やかに新春をお迎えのことと存じます。

広島市医師会をはじめ安佐、安芸地区、大竹市、佐伯地区、山県郡の各医師会の会員の先生方には日頃のご利用ならびにご指導に感謝し、厚く御礼を申し上げます。

さて、当検査センターの臨床検査事業は、新型コロナウイルス感染拡大前（2019年度）と一昨年度（2023年度）で収益を比較すると減少傾向にあり、2024年度の４月から12月までの売上累計も2023年度と比較して減少傾向にあります。こうした状況は、全国の臨床検査センターも同様で、コロナ禍以前と比較すると各臨床検査センターとも概ね５％から８％の減収となっており、今後も厳しい収支状況になることが予想されます。

そのような中、当検査センターにおいては、以前より業務の 5S 活動に取り組んでおり、業務の見直しや人員配置の適正化を行い、事業経費を大幅に削減してまいりました。また、昨年５月に検体搬送システムを導入し、検査前工程の自動化による検査精度の向上とともに事業経費の更なる削減を行いました。

一方で、将来にわたり安定的に事業を継続していくためには、新たな収益源の確保も重要です。2022年度から開始した、広島大学小児科の試験研究である先天性代謝異常検査「拡大マス・スクリーニング」は、2024年度から全国実証事業となり、業務量が増加しました。さらに、全国的に普及してきた「ライソゾーム病検査」についても、2025年度から導入できるよう、広島大学小児科とともに準備を進めております。

また、当検査センターが抱える課題である「次期基幹システムの構築」についても、2027年５月の導入を目指し、品質の向上と業務の効率化、さらには周辺医師会との共同利用が実現できるよう、慎重に検討を進めております。

診療支援についても引き続き取り組んでまいります。「疾患別検査ガイド」は、「CKD 慢性腎臓病2024」の発刊に伴い昨年10月に学術講演会を開催いたしました。また、１月中には「IgG4関連疾患2025」を発刊いたします。「症例報告　新・感染症を知るシリーズ」は感染状況を注視しながら進めており、昨年までに11疾患を発刊いたしました。次号は、「百日咳」を発刊する予定でございます。疾患別検査ガイドとともにご活用いただけますと幸いです。

検査精度については、臨床検査の国際規格である ISO 15189 を昨年９月に新しい規格への移行審査を受審し、要求事項をすべて満たしていることが認められました。今後も品質の維持・向上のため、精進いたします。

本年も先生方に安心してご利用いただけるよう、役職員一同、誠心誠意努めてまいりますので、何卒お引き立ていただきますようお願い申し上げます。